



発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

小教区組織見直しにとまなう

新しい「小教区評議会規約」の

提示にあたって

大司教 高見 三明

去る11月1日付けで各小教区関係者へお届けした教区共通の「小教区評議会規約」の、送付状の要点を皆さまにも紹介させていただきます。

故・島本大司教様は、亡くなられる2カ月近く前の司祭評議会に対して、小教区組織見直しについての諮問をなさいました。その後、その諮問に答えるべくプロジェクトチームが編成され、2年余りにおよぶ検討作業の成果として、このたび「小教区評議会規約」が作り上げられました。

今回の「小教区組織見直し」の土台となるのは、多少不明瞭な部分があった従来の小教区組織を整備し、小教区の「核となる組織」を作ることです。今回お届けする教区共通の「小教区評議会規約」に基づき、それぞれの小教区の現状に合わせた「小教区評議会

長崎教区には、信徒数7000人以上のマンモス小教区や100人以上の小さな小教区が存在するうえに、新興住宅地をかかえて年々信徒数が増大している小教区や過疎化の波に洗われてその運営もままならぬ小教区があるなど、その実状はさまざまです。しかし、わたしたちは、多数であろうと少数であろうと、信徒のみならずその地域に住む、いまだ主食卓にあずかってない方々のためにも遣わされているという視点を常に念頭に置くべきでしょう。

小さな小教区には確かにさまざまの困難もありますが、教区を構成する小教区間の結束とその広がり、の起点となるための「核」づくりにも、ともに取り組んでいただきたいと思えます。その努力を続けることを通して、「神の民」、「キリストの神秘体」としての教会本来の姿をより明らかに示すことができるでしょうし、教会の本性である福音宣教のための大きな助けにもなるものと信じます。

長年にわたるこれまでの小教区の形が変わろうとする際には、誰しも不安を感じるものです。しかしそのような不安感は、これからの動きの中でしだいに払拭されていくことと思えます。

わたしは神のみ摂理によって、昨

年の12月、この伝統ある長崎教区の責任者としての役割を担うことになりました。以来、信仰に根ざした長崎の信者が持つ、前進する力と宣教する力とを実感しております。しかし一方では、すでに統計にも表れてきているように、召命の減少、成人洗礼の減少、少子化、高齢化の問題など、取り組むべき課題が山積しています。激しく変化する時代状況の中では、信徒、修道者、司祭が一体となつて協力し合い、助け合い、知恵を出し合いながら、神の民として生きていくことが何よりも大切だと思っています。

今回の「小教区評議会規約」の提示は、小教区諸活動のための核となる小教区評議会見直しの最初の段階にとどまってしまうましたが、これからも地区、教区レベルの課題についての検討作業をプロジェクトチームで続けていきますので、お気づきのことがあれば、各地区の地区長神父様を通して、同チームの関係者までお知らせください。

教区民全員が神の恵みに支えられ、知恵を出し合うならば、キリストの心を生きる小教区、理想的な姿の教区に近づける日も、それほど遠い将来のことではないでしょう。



み言葉の分かち合いとは (4)

聖書を讀む



2 度目の朗読の際には別の翻訳聖書を朗読することが勧められているのは、同じ聖書の箇所を違った観点からながめることができるうえに、その内容をより深く理解できるようになる可能性があるからです。

2. 聖書を声を出して讀む理由

私たちが祈りをするような気持ちで、声を出して聖書を読むならば、福音を「宣べ伝える」ことにもなります。また聖書の単語の一つひとつが、主の現存の「準秘跡的なるし」にもなります。感謝の祭儀でのパンとぶどう酒と同じように、聖書のみ言葉そのものが主の現存をもたらす「しるし」となるからです。

聖書のみ言葉は、神（キリスト）が私たちに送ってくださる愛の便りです。その愛の便りには、書いたお方の心がそのまま書かれてあるのです。

私たちは、愛するお方からいただいた手紙を読み終えても、またもう一度讀むのです。たとえその手紙の中身を全部覚えて

ようにします）

・「どなたか、第29節から34節までをゆつくりと讀んでくださいませんか。」

（もう一度繰り返して）

・「第29節から34節までです。」

・（読み終えたところで）

「ほかの方が、もう一度同じ箇所を讀んでくださいませんか。」

（他の翻訳聖書があるなら、それを讀むことが勧められます）

進行係が聖書の朗読箇所を説明する際には、書の名称と章や節をなぜ同時に言わないのでしょうか。多くの人には、章と節を同時に記憶するのは困難だからです。章と節を同時に言われると、隣りの人とか進行係に尋

「みことばの分かち合い」はその目的によっていくつかのタイプに分けられますが、聖書を声を出して讀むという行為そのものは共通ですので、今回は聖書の開き方や聖書を声を出して讀む理由などについて考えてみたいと思います。

1. 聖書の開きかた

「主をお迎えする祈り」が終わったら、進行係は次のように言いながら参加者たちに聖書を読んでもらいます。

・「みなさん、マタイの第20章を開いてください。」

（もう一度繰り返して）

・「マタイの第20章です。」

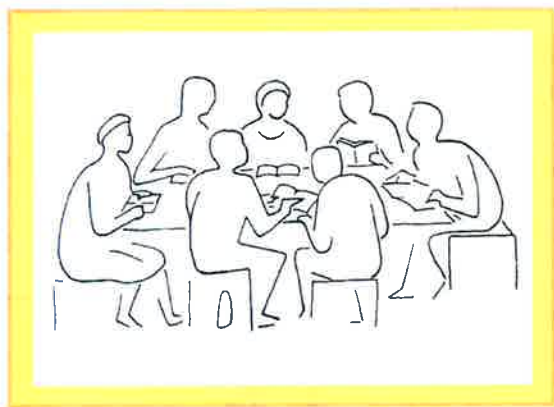
（全員がその章を開け終えるまでは、何節なのかを知らせない

ねながら開けていくことになり
ます。それは参加者に緊張感を与
え、その前の「主をお迎えする」

段階で得られた霊的な雰囲気
壊すことにもなります。参加者全
員が安心して正しい朗読箇所を
聞くことができるようにするた
めには、このような形で聖書の個
所を知らせるほうがよいのです。

進行係は讀む人を指名しない
で、誰かが自発的に読み始めるの
を待ちます。そうすることによっ
て、参加者たちは積極的に参加で
きるようになるのです。

朗読する時は、イエス様が弟子
たちや会衆に話されたときのよ
うに、大きな声で、気持ちをおこ
めて、祈るような感じで読みます。
そうすれば、聞いている人にとつ
てはそれが神の声、キリストの言
葉として響くようになります。



しまったとしても、繰り返し読むたびに、その手紙を書いてく
ださったお方と一緒にいること
ができるのです。「み言葉の分か
ち合い」で繰り返し聖書を読
む目的は、そこにあります。こ
の段階の聖書の朗読は、私たち
とともにおられる神(キリスト)
との出会いを体験し、そのうち
に留まることができるための一
つの方法なのです。

「みことばの分かち合い」では、
進行係もメンバーの一人になり、
特別な席には座りません。たと
え司祭やシスターが参加したと
しても、同じ立場で参加します。

進行係は、参加者全員を同じ兄
弟・姉妹として平等に扱います。
それは参加者一人ひとりが積極
的に参加することを願っている
からです。

進行係は、参加者一人ひとり
が自分のタレントを十分に生か
せるように、参加者たちが自分
でできることについては何もし
ないように心がけます。

3. 朗読箇所

「み言葉の分かち合い」で朗読す
る聖書の箇所は、どのように選
べばよいのでしょうか。聖書は
神のみ言葉ですからどこを選ん
でも良いのですが、次のように
することもできますでしょう。

①地区(班)集会の場合

次の主日の福音の箇所を活
用するのが便利です。さらに、
事前にその聖書のみ言葉の分か
ち合いを行なうことよって、主
日のミサにあずかるよい準備と
なるうえに、その「み言葉の祭
儀」の中身もより深く味わうこ
とができるようになるでしょう。

②小教区評議会等の会合の場合

会議の目的にふさわしい箇所
を前もって選んでおくほうがよ
いでしょう。神が望まれる内容
の会議になる可能性が大きくな
るからです。それが難しいよう
な場合は、次の主日の福音の個
所を選んでよいと思います。

4. 聖書をスムーズに

開くために

実際に「み言葉の分かち合い」
をやってみると、進行係が告げ
る朗読箇所をスムーズに開ける
のが難しいことがあります。
スムーズに朗読箇所を開ける
ことができるようになるために
は、聖書全体の目次(各書の順
序)を覚えながら、自分で開く
練習をすることが必要になりま
す。自分が持っている聖書の目
次を開き、その順序を眺めてみ
ることから始めます。

聖書は、「旧約聖書」と「新約
聖書」とに大別されます。

旧約聖書は、歴史書↓文学書
↓預言書という順序になってお
り、それぞれの中に多くの文書
が入っています。旧約聖書の中
間あたりが文学書の一つである

「詩編」の位置になります。

新約聖書は、福音書(マタイ・
マルコ・ルカ・ヨハネ)↓使徒
言行録↓使徒たちの手紙↓黙示
録という順序になっています。

「み言葉の分かち合い」では、翌
週の主日の福音の箇所を用いる
ケースが多くなると思いますの
で、まずは福音書の箇所だけは
すぐに開けることができるよう
にしておくべきでしょう。

聖書の目次を覚えやすくする
ために、ある宣教師が次のよう
な「替え歌」を作って活用して
おられたので、ご紹介させてい
ただきます。メロディーは「鉄
道唱歌(汽笛一声)」を用います。
これはその中の「新約聖書」の
部分ですが、ためしに口ず
さんでみてください。

一. マタイ マルコ ルカ ヨハネ
使徒 ローマ 2つのコリント書

ガラテア エフェソス コロサイ書
テサロと テモテは 2つの書

二. テト フィレ ヘブライ ヤコブの書
ペトロが2つに ヨハネ3つ

ユダと 黙示で 27
旧・新合わせて 74(ななじゅうし)



「シリーズ」

現代を生きる信仰

みやかわ としゆき
宮川 俊行

長崎教区司祭

— どう理解すれば？ —



信仰の異なった

隣人との協力



現代教会の使命

カトリックの信仰の理解によれば、三位一体の神が究極的に目指しておられるのは、神のいのちの交わりにすべての人間が与り一つになることである。教会が主キリストから派遣されているのも、まさにこの目的実現を目指す。現世において奉仕するためである。

現在、教会の奉仕が特に求められている人類の重要問題の一つに、諸宗教間の平和と協力関係の建設がある。第二バチカン公会議もこのことを確認している（「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」1）。われわれキリスト信者自身、隣人の「異なった」信仰に対する尊敬

と寛容な心をもつだけでなく、地上の人々がすべて「異なった信仰」の隣人たちと平和の中に共存し、人類の福祉の向上のため協力していくような社会関係が生まれるよう奉仕していくことは、現代教会が神から期待されている使命だ、というのである。

社会的寛容

現代社会で生きる者にとって、万人の本質的平等、平和や正義、また人権の尊重など基本的価値の受け入れと並んで、「異質なものに對する寛容」が「非常に大切な」徳目の一つとなっていることは、世界的に大体同意が成立していると言えよう。

容貌、言語、民族性、国籍、個

性、健康状態、人生観、美についての感覚、伝統、文化、習慣、嗜好、職業などの点で互いに異なっている者同士が、混じり合い身近に共存するようになってきたのが現代である。このような状況の中で平和裏に社会生活を行い、相互に助け合い、連帯して共同の課題と取り組んでいくためには、多くの点で自分と異なっている他人を偏見無く隣人として受け入れる社会的寛容を、全員が身に付けていなければならない。人間が有限な、しかも多様な社会関係の中に生きる、社会的存在である以上、「異質なものに對する寛容」はどの時代にあつても必要な徳だが、現代においては特にこの重要性が高まっているのである。

異宗教に対する寛容

このような社会的寛容の中で「異宗教に対する寛容」が格段に難しいことは、すでに歴史が証明

済みである。

宗教は強い信仰上の確信を基礎に成立している場合が多い。それだけ、他者の異信仰に不寛容になりがちである。事実、世界には宗教ゆえのほげしい対立が昔から多い。たいていこれに政治や権力や経済的利害や欲望や誤った信念などが密接に絡まり、問題を一層複雑にしている。宗教戦争も過去にはあつたし、宗教がらみの相互不信・緊張関係やごたごたから世界各地にさまざまの種類のものが今もある。信仰者は人類の福祉に貢献できるのか、という疑問さえ出て来かねない。

キリスト教と他宗教

キリスト教は人類の唯一の救い主イエス・キリストによる啓示に対する信仰的応答の宗教である。しかし地上の多くの宗教の中には、少なくとも、ユダヤ教、イ

スラム教、仏教、ヒンズー教、それに日本の神道など世界の優れた宗教は、その信者に、人格の尊厳に相応しい高貴な生き方を可能にし、三位一体の神との何らかの形での関わりを無意識の中に行わせる力を秘めている。良心の声に従って生き、不変の真理や不滅の愛を求めて真剣に生きる人生を、実際これらの宗教を通して誠実に生きた無数の人たちがいることも、歴史は証している。これらの尊敬に値する宗教が人類の歴史に残している優れた文化遺産から見ても、これらの宗教には人々を平和的共存・協力と理想的社会建設に向かつて動かししていくことのできる力があることは明らかである。

たしかに、キリスト教も含め、これらの宗教も歴史の中での具体的な在り方においては人間の乱れた欲望や悪への傾きや野心に動かされたり、現世的諸価値や権力の影響を受けたり、政治に利用されることなどもあり、さまざまの汚点を歴史に残してきた。キリスト教については、教皇ヨハネ・パウロ二世が大聖年の2000年3月12日、バチ

カンでの四旬節第一主日の「ゆるしを願うミサ」の中で、過去二千年間におけるキリスト信者たちの本来的使命からの逸脱や犯した数々の誤ちを公に認め、心から神と人類にゆるしを願った。

過ちや逸脱は他の宗教においても勿論見られたが、われわれはこれらのマイナス面のみに心を奪われ不信や恨みに支配されてはならぬ。自分の罪や誤ちを認め、ゆるしを乞うと同時に、われわれも、もし「信仰を異にする」隣人たちから受けた差別や迫害があつたにしても、その痛みを忘れ、かれらをゆるさねばならない。そしてまた、このような謝罪とゆるしの関係が他の宗教の間にも生まれるよう協力しなければならぬ。

本来的・中心的性質に注目する限り、これらの宗教には人類の現世のさまざまな悲惨さの克服のために戦う力は充分にあり、協同で課題に挑める盟友となりうる。キリスト教も含め、諸宗教の協力は、間違い無く現在の世界の状態を変えるに違いない。

現世問題への宗教の責任

諸宗教間の理解や連帯はさまざまな問題領域で可能だが、ここでは現世の諸問題との取り組みにおける協力を注目してきた。これは社会正義の実現を目指す取り組みで、諸宗教の信仰者の全員が参加可能である。このままではいけない、この現状を放置しておくわけにはいかない、この悪の克服に全力を挙げねばならない、という判断において、信仰や信仰道徳や組織や儀礼などの違いにも拘らず諸宗教の信者たちが「一致」しうるような現世の重要問題は多い。例えば、平和実現、地球環境保全、胎内生命保護、幼児生命保護、識字教育徹底、救貧、女性・幼小児の人権保護、障がい者・高齢者・瀕死者の人権保障などである。われわれの信仰が建設を促している理想世界には断じてあってはならないもの、それゆえこの問題の解決は今全力を挙げて取り組むべきもの、自分たちの宗教はこのような現状の克服へと信仰者たちを励ますものであること、をすべての信仰者が感じるとき、自ずと協力関係形成への道が開ける。教会はそのような認識へと人々を誘導し、協

力関係の形成を目指さねばならない。各々の宗教は自己の信仰に基づくこのような行為の独自の意義付けをするにしても、行為そのものは諸宗教において共通でありうる。すべての信仰者たちは人間本性に根ざした判断によって、人類はどのような社会を建設せねばならぬかについて、すなわち、目指すべき理想社会に関して大体一致した考えをもっている。それゆえ、これらの問題との取り組みにおいて自己の宗教の囲いを超えた協力ができる。協同で取り組むことによつて非常に大きな成果を挙げることができぬ。

このような、明るい未来に向けての諸宗教の連帯と協力は、相互の理解をより深める結果をも生むに違いない（教皇庁諸宗教評議会・福音宣教省「対話と宣言」、42の2、44）。



小教区 ピクアツ

たもと
袂を分けた

兄弟たちとの一致

— 黒崎教会 —

長崎のキリスト教の歴史には、禁教令や、弾圧、迫害の歴史が刻み込まれている。そしてかくれキリシタンの町・外海地方では、今もなおこの歴史がつづり続けられている。

この地にある黒崎教会では、ここ数年、枯松神社祭、クリスマス・ミサに旧キリシタンの方々や信徒の方々と一緒に祈りを捧げていると聞いている。そこで今回は同教会の主任司祭にその内容を伺ってみた。

◆◆どのようになつたか

◆きつかけとなつたのですか◆
この黒崎には、弾圧が終わると、「トコ神父のもとに付いた者（カトリック信者）が半分くらい、あとの半分は、そのままの状態に留まった者」と寺の方に付いた者との2つに分かれ、3つのグループになりました。

2000年の聖年に教皇様が「同じキリストを信じながら袂を分けた兄弟たちとの一致」を呼びかけられたことから、この地で実現できないものかと考えました。

そこでこの教会の近くにある枯松（かれまつ）神社ではそれぞれが別々に祈りを捧げてい

たのを、「サン・シフン枯松神社祭」という名称にして、「先祖たちの信仰は共通のものだったのだから、『サン・シフン様』への感謝と先祖の慰霊」という目的で「ミサを一緒に捧げましょう」と申し出たのがきっかけです。

◆◆その時の「ミサ」は

◆どのようになつたのですか◆
枯松神社祭では、カトリック以外の人たちには最前列に座っていただき、一緒にミサに参加してもらいました。ミサの中では、共同祈願と奉納を担当していただきました。奉納物は、旧キリシタンの方はオラショ、仏教徒の方はお神酒（みき）と果物、カトリック信者はパンとぶどう酒をそれぞれ捧げました。

一方、クリスマス・ミサは、馬小屋礼拝をしていただきました。ミサの後は、信者と一緒に信徒会館でお茶を飲んで祝うという形をとっています。

◆◆この「ミサ」を通じて

◆◆何かの変化がありましたか◆◆
一昨年、第3回目の神社祭が終わったとき、約70年前に建てられた神社の老朽化が激しいので全面改築をしてはどうか、と話を持ち出してみました。三者合同の話合いがなされ、何の抵抗もなく「枯松神社全面改築実行委員会」が結成されて、改築実現へ向けての奔走が始まりました。

心配していた資金は、三者の熱意により三カ月後には予算額に達し、さらに外海町の文化財に指定されていたので町からの助成金も

出て、さきさく全面改築が可能になりました。このようにして、昨年の11月には、高見大司教司式のもとに、元の形が忠実に復元された神社の祝別式と慰霊ミサ、という式次第の第4回枯松神社祭を、約四百人の参列者とともに盛大に行うことができました。

皆の共通の先祖の遺産である「サン・シフン様」をお祀り（まつり）している枯松神社を通して、三つのグループが心を合わせて「一つのことを成し遂げて共に祈る」一時を与えていただいていることを、心から感謝しています。

今年行われた第5回枯松神社祭には、この地にある曹洞宗のお寺のお坊様の講演や旧キリシタンの方の洗礼式なども組み入れられ、「袂を分けた兄弟たちとの一致」が一歩ずつ進んでいる、との実感を抱いた。



枯松神社



「ハナちゃん」



嵐が通り過ぎた日の夜中、ハナちゃんは予定より一月半も早く生まれました。

その日、お母さんはおなかの赤ちゃんをかばいながら、嵐が過ぎるのをじっと待っていました。そんなお母さんを心配して、お父さんは会社から早く帰ってきたのです。ほっと安心したお母さんでしたが、おなかが急に痛み出しました。急いで病院に行きましたがよくなりません。このままではお母さんも赤ちゃんも危なくなり、救急車で大学病院に運んで、赤ちゃんを救う手術をすることになりました。

おじいちゃんとおばあちゃんが病院にかけつけた時、赤ちゃんは保育器の中で生きる戦いをしていました。お母さんは手術の時の出血が止まらず脳内出血もあって、今度は頭を手術することになりました。お父さんたちは手術室に運ばれるお母さんに、「がんばれよ！」と呼びかけますが、お母さんは何もこたえません。お父さんたちは悲しくなりました。でも、どうしてやることもできないのです。今は神様に祈るしかありません。

“神様、赤ん坊に母親の笑顔を見る喜びを与えてください”

“神様、この母親にわが子を抱く幸せを味わわせてください”

手術は4時間もかかりました。お医者さんは、「できることはすべてやりました。後は出血と脳のはれが収まればよいのですが・・・」と、心配そうに言います。おじいちゃんは病院の近くの教会の神父様に頼んで、眠ったままのお母さんに“病者の塗油”を授けてもらいました。神父様は、「みんなで祈りしてください。私たちも祈っていますから」、と言ってくれました。おばあちゃんは親戚や知り合いの人たちにお祈りをお願いしました。シスターたちの「お祈りしています」という言葉に、おばあちゃんはとても勇気づけられました。

6日目、お母さんは眠ったまま頭や手足をしきりに動かします。苦しいのでしょうか。お父さんが、お母さんの手をそっと握ってあげました。すると、あ

んなに辛そうだったお母さんが、穏やかな顔になって静かに眠ったのです。おじいちゃんはお母さんの左手に、そっとロザリオを握らせて部屋を出ました。外は、また嵐が近づいて来ていました。

嵐が通り過ぎた翌日夜遅く、おじいちゃんの電話が鳴りました。

「今、意識が戻りました！」

「赤ん坊の名は、ハナちゃんにします。」

お父さんからでした。意識が戻ったお母さんが最初に言った言葉は、『ハナちゃんは元気？』でした。お父さんはすぐ気がつきました。お母さんは夢の中で、まだ名前のないわが子を“ハナちゃん”と呼んでいたに違いありません。お父さんは迷わず赤ちゃんの名前を「ハナ」と決めました。ハナちゃんの名前は、こうして付けられたのです。

その後、ハナちゃんもお母さんも、たくさんの人々のお祈りのおかげで奇跡的に快復していきましました。早くハナちゃんを抱っこしたいお母さんは、必死でリハビリに励みました。やっと一週間後、抱っこする許可が出ました。ハナちゃんは、車椅子でやって来たお母さんに初めて抱っこされます。ハナちゃんをひざの上をしっかり抱いたお母さんは、「ハナちゃん、お母さんだよ。よかったね。よくがんばったね。お母さんもハナちゃんのおかげで助かったんだよ。ありがとうね。」

子守唄でも聞かせるみたいに、何度も何度もハナちゃんに囁きかけます。お母さんの涙がしずくとなって落ちてきます。その涙のしずくを、ハナちゃんの産着がぜんぶ受け止めて吸い取ってくれました。お母さんに初めて抱っこされたハナちゃんは、いつの間にかスヤスヤと眠ってしまいました。

多くの人びとのお祈りと神様の大きなお恵みに感謝しながら、わが子を自分の手で育てられる幸せいっぱいのお母さんに抱っこされて、ハナちゃんは今日もすくすくと成長しています。

(にしむら よしを)

生活教会

時を越えて

互いに向かい合っ
て建つ新旧の教会堂。
やって来る一人ひと
りを慈しみ、その一人
ひとりの人生を目を
細めて語り合ってい
るかのようだ。

旧教会堂は一九〇三年、
マルマン師の設計、大崎師
の監督によって建立された。
時の信徒たちは乏しい中か
ら拠出し、労働奉仕も惜し
まなかったという。

四十五年後、改築に着手
した。信徒たちは自分たち
の山から木材を切り出し、
正面の塔は旧浦上天堂の
被爆レンガを譲り受けて構
築し、約一年をかけて増改
築を終えた。

旧教会堂建立から七十数
年後、道向師と信徒たちは、
新教会堂の建設に取り掛か
った。敷地の確保、建設資
金の捻出など多くの辛苦を
乗り越え、一九七九年三月、
完成にこぎつけた。一戸当
たりの拠出額は百万近くに
もなったという。

飢餓責め、算木責めなど
の拷問に耐えた人々、「鷹の
巣六人斬り」にあった中田
家の人々、殉難したフレル
神父と十二人の信徒たち。
数々の信仰の遺功は、時を
越えて受け継がれ、新旧の
教会堂に結実した。

旧堂はすでに百年を超え、
新堂は四半世紀の時を刻む。
両堂の歴史は、中野の地に
根付いた信仰とともに輝い
ている。



鯛の浦教会

フォトプラン 山本 富夫